

## 統治の技術としてのジェンダー訓練\*

和田 賢治\*\*

### はじめに

1990年代から平和維持活動（PKO：Peacekeeping Operations）の任務と規模の拡大に伴い、現地での平和維持要員による性的搾取および虐待（SEA：Sexual Exploitation and Abuse）が表面化するようになった。ときに数万にもものぼる多国籍軍の中長期的な駐留は、武力紛争後の治安維持と復興支援に不可欠であるとされる一方で、売春宿の増加、人身取引の拡大、HIV/AIDSの蔓延、子供の権利の侵害、そしてレイプなど女性に対する暴力といった側面を併せ持つものであった。この事態を受け、国連は対策の一環として「ジェンダー訓練」を導入した。ジェンダー訓練は武力紛争および紛争後において、男性と女性の間で異なる経験とニーズが存在すること、さらに平和維持要員の行為が現地の人々に少なからぬ影響を与えることを認識できるようジェンダー視角を平和維持要員に身に付けさせることを目的とする。<sup>2</sup>

ジェンダー訓練の開発の背景には、ジェンダー研究において蓄積されてきた知識を実践的な問題解決へと結びつける「ジェンダー専門家」の存在があった。<sup>3</sup>ここで専門家に期待される役割は問題の原因を特定し、具体的な解決策を提示するところにある。SEAの原因の特定という点で、ジェンダー専門家は平和維持要員となる兵士のアイデンティティである「軍事化したマスキュリニティ」（militarized masculinity）を問題化した。次に解決策の提示という点で、専門家は平和維持要員としての最適なマスキュリニティ（男

\*〔謝辞〕本稿は、研究会・分科会での拙報告に対する討論者（遠藤貢先生、戸田真紀子先生、原田太津男先生）からの、そして草稿を精読してくださった方々（小林誠先生、大貫裕則氏、上野友也氏、山口治男氏）からの貴重なコメントを参考にしている。

\*\* 神戸大学大学院国際協力研究科学生

らしさ)を選択することを促すジェンダー訓練を推進してきた。しかしながら、この点について、次の疑問が生じる。ジェンダーは「選択」できるものであるのか。どのようなマスキュリニティが最適なものであるのか。そしてなぜ、それは最適とみなされるのか。

これらの疑問を探求する上で、本稿はミシェル・フーコーの「統治性」(governmentality)という概念に依拠する。フーコーによれば、統治とは制度に関する問題ではなく、行為の構造化に関わる言説とその実践を指す(Foucault 1982: 789-790)。この種の統治を可能にするものは行為を計算可能なものとする、あるいは行為の不確実性を減らす、近代諸科学の発展を介した権力と知識の結びつきであった(以下、権力/知と略する)(Gordon ed. 1980)。それは本来、多様であるはずの個人の有り様を時々の政治的合理性に適應するよう特定の形式の主体へと変容させる統治技術を国家に提供してきた。この主体生成の過程において、権力/知は主体そのものを対象とするだけではなく、明示的にも暗示的にも主体とはなりえない存在「他者」も対象とする言説を社会へと送り込む。本稿はジェンダー訓練を一つの統治技術と見立てながら、平和維持要員という主体が生成される過程について批判的な考察を加える。

本稿の構成は次の通りである。第一節では専門的権威という観点からPKOの構造を照射し、第二節では安全保障分野へのジェンダー専門家の進出とその影響について整理する。第三節ではジェンダー訓練のプログラム

化とSEAに関する分析を概観した後、第四節ではジェンダー訓練を通じた主体の生成過程における問題の所在について明らかにする。この問題を具体的に検討する上で、第五節では専門家による議論、逸話、分析を取り上げ、他者を主体の位置から排除する言説体系の分析を試みる。

### ・ 文明化における専門家の役割

冷戦の終焉以降、PKOはその任務の範囲を国家間紛争の再発防止を目的とした兵力の引き離しや停戦監視から、国内での武力紛争の再発防止を目的とした国内制度の民主化や経済政策の自由化の支援にまで拡大してきた。ローランド・パリスは、この多機能型PKOを内戦後の国家へと「リベラル市場民主主義」を移植することを目的とした「文明化のミッション」と名づけた。さらに俯瞰して、パリスはそのミッションが紛争解決の手段に留まらない、国際システムの中心から周辺へと文明化した行動規範、価値、制度を伝える新たな歴史的局面であるとも指摘した(Paris 2002: 638, 653-4)。

この文明化のミッションという呼び名は、西洋諸国による非西洋諸国に対する植民地支配の歴史を想起させることを狙ったものである。かつて西洋諸国は「文明化」の名の下、自ら(の国家)を統治できない「野蛮人」として現地の住民を扱い、搾取と暴力を伴う支配を正当化してきた。その思想的な拠り所は、理性の段階にある(とされる)西洋人が非西洋人をその段階へと導くことを使命とみなす

啓蒙思想、ダーウィニズム的進化論、そしてリベラリズムにあった（Bowden 2004, Metha 1990）。これに対して、パリスは現代における文明化のミッションが人的かつ物質的な搾取を目的としないこと、その倫理を人種主義的な優越性に基づかせないこと、そして当事者間の合意に基づく期間限定の任務であることから、過去の植民地主義とは異なる点を強調する。その過程で生じた搾取や暴力は、一部の逸脱した個人や集団による例外的な出来事として取り扱われる（Paris 2002: 652-653）。要するに、文明化のミッションは植民地主義、帝国主義、そして人種主義といったかつての支配的イデオロギーから明確に切り離された位置を確保する。

事実、PKOを含む国際機関によるグローバル・ガバナンスは、もはや内在的な理性の有無にではなく、「客観」的に発展の程度を示す近代諸科学の知識の産出にその正当性を依拠している。マイケル・バーネットとマーサ・フィネモアによれば、国際機関の正当性はリベラル市場民主主義による発展を柱とする「グローバルなリベラリズム」の普遍化を妨げる諸問題に対して、原因の特定と解決策を提示する「専門的権威」に部分的に依拠しているという（Barnett and Finnemore 2005）。<sup>6</sup> その権威を支えるのは、複雑な環境や多様な諸個人を測定、比較、そして管理可能な空間や抽象的個人へと変換する理論、概念、道具を開発する専門家である。そこで用いられる西洋近代を起源とした知識は、その特性である「客観性」ゆえに、すべての地域、

国家、社会、個人に適用可能なものとされる。例えば、国際機関の利用する統計は教育、医療、福祉など市民の生活の質を細部に至るまで数値化することにより、国家の統治パフォーマンスを測定し、序列化することにより、一目で問題のある国家を特定できる。その国際基準を下回る国家は、国際的に承認されたガイドラインや援助パッケージに沿った改革を求められ、それらを拒めば、制裁の対象となる。この専門的権威の最大の効果は、国際機関による指導や介入を政治的に中立かつ公正な外見を装わせる脱政治化にある（Barnett and Finnemore 2005: 173-4, 180-1）。統計上の数字や概念の外側にある「現実」

例えば、植民地化の歴史、不平等な国際政治経済の構造、人種主義などのイデオロギーは捨象されることになる。<sup>7</sup> 結果として、問題と責任の所在は国際基準を満たすことのできない国家に帰するところとなる。

こうして専門的権威は文明化した行動規範、価値、制度の普遍性を担保する後ろ盾となる。パリスは言及していないが、これらの伝播の流れを規定する国際システムの中心-周辺の関係は、さらに文明化のミッションの内側にも見出すことができる。冷戦後のPKOの特徴はその多機能性だけではなく、平和維持要員となる兵士の派遣を南アジア、アフリカ、南米などの途上国地域に大きく依存するようになってきたところにもある。<sup>7</sup> UNSOM（ソマリア）での苦い経験以降、先進国が自国の兵士の派遣に後ろ向きとなっていった一方で、途上国にその参加への扉が

さらに広く開かれるようになった。しかし、財政的余力のない途上国の多くは、平和維持要員として訓練するための施設、訓練プログラム、トレーナーなどを欠いていたことから、国連と先進国はその支援を申し出た。全てのミッションに一般化できないものの、途上国が現地で活動する肉体労働を担い、先進国がその蓄積された知識、技術、経験を提供する頭脳労働を担うという南北の分業体制が今日のPKOを支えている。<sup>8</sup> パリスと同じく俯瞰していえば、文明化のミッションは国際システムの周辺部だけではなく、周辺と中心との間にある準周辺に位置する国々にも文明化した行動規範、価値、制度の移転を推し進めているのである。

ここで注目すべき点は、平和維持要員のための訓練の内容がパトロール、検問、射撃、運転といった基本技術の伝達に留まらないことである。原則として、PKOの訓練は個々の国家に委託されており、参加する兵士全員がその訓練を受けているわけではない。一部では、軍の通常訓練の範囲でPKOに対応できるとも考えられてきた（Miller 1997）。しかし、多機能型PKOにおいて、平和維持要員は内戦後という政治的に流動的な環境の中で現地住民との接触する機会を増したことに加えて、平和維持要員の多国籍化が進んだことから、文化的差異から生じる誤解や偏見が平和を回復する機会を奪うことにもなりかねない（Duffey 2000: 146-147）。結果として、平和維持要員に求められる能力は国際的な人権基準の遵守、活動地域における文化的差異

への理解、そして文民・NGO・現地の住民との信頼関係を生むコミュニケーション能力を含むようになってきている（Fetherston 1995, 1994: 17-18）。つまり、国連は平和維持要員の数を揃えるだけでは不十分であり、その「質」についての管理も求められている。この要請に応えるため、専門家は国際的文明化した行動規範を遵守させることを目的とした訓練プログラムやガイドラインの開発に着手することになる。ジェンダー訓練はその新しい道具であり、次節ではその開発に關与する専門家の役割と影響について検討する。

#### ・ 実学化するジェンダー

ジェンダーは、1960年代後半から心理学と社会学から発展してきた概念である。それは自然的・生物学的性差であるセックスと対比して、社会的・文化的性差として定義される。この対比は、セックスと異なりジェンダーが時代や環境の変化、地域や文化の違い、あるいは人種、階級、セクシュアリティなど他の諸要素との複合的な結びつきなどによっても変わるものであることを含意する。また、ジェンダーはフェミニニティ（女らしさ）とマスキュリニティから成り、例えば、西洋社会において理性／感情、合理性／不合理性、独立／依存など、相互を参照しながら二項対立的に構築される。この新たな性差の提起は、それまで男女の性質、社会役割、行為、アイデンティティなどを性別により固定的に振り分けてきた支配的通念が、自然的・生物学的

根拠を持たないことを明らかにした。この学術的発見は、まもなくして女性の社会的地位の向上を目指す（リベラル）フェミニズム運動を理論的に支える後ろ盾となり、男女の機会平等を促進する諸政策の実現を後押しすることになった。

1980年代、欧米の大学がジェンダーに関する学位等を持つ専門家を世に輩出すると平行して、ジェンダーは公的な政策との結びつきを強めていくことになった。ジェンダー問題を取り扱う政策市場は国際レベルにも拡大して、1980年代中盤からの開発分野を嚆矢として（Parpart 1995）、1990年代には安全保障分野にも専門家が進出するようになった。その大きな契機は、旧ユーゴスラヴィア内戦における大規模な女性に対する性暴力であった。<sup>9</sup> その調査と分析にあたった専門家は性暴力が散発的なものではなく、敵対する勢力を「去勢」する、あるいは彼らの「無力さ」を示すメッセージ性を含意する組織化された戦術であることを指摘した（Rehn & Sirleaf 2002: 2、クマラスワミ 2000: 147）。被害者への聞き取りを実施した専門家は、現地の情報を国連や先進国の政策決定者に提供することにより、存在感を高めていったと指摘される（Harrington 2006）。

また、1995年に北京で開催された第4回世界女性会議は、安全保障分野へのジェンダー専門家の進出をさらに後押しした。同会議は「女性と武力紛争」を議題に取り上げ、この問題に対処する国連を含む諸機関に対して、「武力又はその他の紛争に対処するに当たり、

決定が下される前に、それらが女性及び男性のそれぞれに及ぼす影響の分析がなされるよう、あらゆる政策及び計画の中心にジェンダーの視点を据える、積極的で目に見える政策を促進すべきである」と提言した。<sup>10</sup> いわゆる「ジェンダー主流化」（gender mainstreaming）として普及したこの戦略の目的は、「ジェンダーに基づくヒエラルキーと権力関係をもはや補強することのない制度と構造を開発することである」（Rees 2005: 559）。「ジェンダー・ヒエラルキー」とは、マスキュリニティが常にフェミニニティよりも特権化される価値体系を意味するものであり、制度、規範、法律、文学、言語、延いては私たちの認識に埋め込まれ、広範かつ深遠に社会秩序の一部を成している。それゆえ、マスキュリニティは見えないほど「自然」な基準として社会に浸透しており、その基準を満たしえない人々（女性、同性愛者、人種のマイノリティなど）は権力、資源、そして地位へのアクセスを制限されることになる（Peterson & Runyan 1999: 31）。

しかし、ジェンダー主流化は日常的には不可視なジェンダー・ヒエラルキーの解体を目指していることから、政策の策定や現場で活動する人々にとって、どのように自らの仕事に反映させるのか、理解に窮する戦略としても知られていた。そこで理論と実践を架橋するため、ジェンダー専門家が招聘されることになる。例えば、「ジェンダー視角の国連システムの全ての政策とプログラムへの主流化（事務総長報告）」によれば、専門家の役

割として次の五つを挙げている ジェンダーに配慮した政策等の開発、 スタッフへの助言と支援の提供、 主流化のための道具と方法論の開発、 情報およびベスト・プラクティスの収集と普及、 主流化の進展に関する評価と監視 (UN Doc. E/1997/66)。このように専門家はその知識を活かした多くの役割を割り当てられるわけだが、ただし、その関与が必ずしもジェンダー主流化を推進するとは限らないというパラドックスについては留意しておくべきである。その戦略を導入する多くの機関が、根本的な制度改革を伴わないトークニズムに陥る傾向にある (Woodward 2003: 67, Beveridge & Nott 2002)。その一因に挙げられるのは、排他的メンバーシップにより政策の策定や評価を実施する「専門家 - 官僚モデル」の弊害である。<sup>11</sup> 官僚が既得権益を脅かす改革に抵抗する傾向は論ずるまでもないが、外部から招聘される専門家もその改革を形骸化する一翼を担う。前述の専門家に割り当てられた役割は、革新的な政治目標を官僚に飲み込ませる改革の大鎧を振うのではなく、あくまでジェンダーという掴みどころのない概念を政策的に有用性の高い道具へと組み替えるところにある。専門家の意図しないところであるせよ、ジェンダー主流化は当初の目的よりもむしろ、その戦略を採用した機関の既存の目的を達成する効果的な手段として「売り込まれる」リスクを常に孕んでいる (Pollack & Hafner-Burton 2000: 452-3, Jahan 1995)。こうした道具のひとつがジェンダー訓練であ

り、次節ではその発展の経緯と内容について見ていこう。

### ジェンダー訓練の発展と射程

ジェンダー主流化は、2000年10月に採択された安全保障理事会決議1325によりPKOへと導入されることになった (UN Doc. S/Res/1325)。先述したように多機能化する任務の遂行において、平和維持要員は基本技術以外の能力を求められるようになっており、ジェンダー主流化の実践もその一環として次のように位置づけられている。「平和維持要員は、ジェンダー平等に関する規範や習慣という現地のダイナミクスを理解しなければならず、全ての人々が紛争および紛争後に同じ経験を持つと仮定してはならない」 (UN Doc. A/57/731, 9)。例えば、地雷の被害者支援において、腕や足を失った女性が男性よりも家族から見捨てられる可能性が高いこと、また武装解除・動員解除・再統合 (DDR: Disarmament, Demobilization and Reintegration) において、女性は戦闘員、召使や性的奴隷として従軍していたものもいる (UN Doc. A/57/731, 9-11)。こうしたジェンダーの次元に配慮するため、ジェンダー専門家が平和維持要員を対象としたジェンダー訓練の開発のために招聘されることになった。

ジェンダー訓練の発展の経緯について触れておくと、国連に先んじて1990年代後半からカナダがイギリスと共同で「ジェンダーと平和支援活動」と題するプログラムの開発を進

めていた。<sup>12</sup> それを参照しながら、2000年2月から平和維持活動局（DPKO: Department of Peacekeeping Operations）の訓練評価課（TES: Training and Evaluation Service）が、PKOに参加する兵士および警察官用のプログラムを開発を開始した。同年5月に発表された『「多角的平和支援活動におけるジェンダー視角の主流化」に関するナミビア行動計画』は、DPKO作成のガイドラインを派遣国の訓練に組み入れることに加えて、活動地域への派遣直後に実施される入隊訓練に次の四項目を含めることも推奨した（平和維持要員としての）行動原則、<sup>13</sup> 赴任した国の文化、歴史、社会規範、女性差別撤廃条約、セクシャル・ハラスメントと性暴力に関する知識（UN DPKO 2000: 33-4）。また、上述した同年10月の国連安保決議1325はジェンダー訓練の制度化に向けて、ガイドラインの提供や財政および技術支援を関係各国に要請した。この決議以降、TESはUNTAET（東ティモール）とUNMEE（エリトリア・エチオピア）で試験を行った後、2001年にアンジェラ・マッケイを中心に『ミッション訓練におけるジェンダーと平和維持活動』（以下、『ミッション訓練』と略する）というガイドラインを取りまとめた（UN DPKO 2001, Mackay 2005）。訓練の主な構成は、講義、ペーパー・テスト、ディスカッションであり、内容はジェンダー問題（難民、強制的売春、レイプ、セクシュアル・ハラスメント、活動地域の歴史と文化など）や女性に対する暴力や差別に関する国際人権法や国際人道法

などを取り扱う。また、このガイドラインは現場で指導にあたるトレーナーに向けて書かれているため、実施にあたっての細かな注意と助言も併記されている。

ジェンダー訓練が現場へと投入されると、当然ながら、その運用上の課題が浮かび上がるようになった。例えば、訓練に費やされる日数は2、3日程度であり、追跡調査も実施されていないことから、短期間のうちにどの程度の効果が期待できるのか疑問視されている。また、訓練を受ける機会は派遣前であれば各地域の訓練センター、派遣後であれば現地のジェンダー・ユニットなどを通じて提供されるが、全ての平和維持要員が受けるわけではない（Mazurana & Piza-Lopez 2002: 51）。さらに深刻な問題は、訓練の意義や目的が受講者になかなか受け入れられない現実である。現場で指導にあたるトレーナーは、受講者からの反発や批判的な態度に直面する場面や訓練の実施自体について軍の上層部から理解を得られない事例もある（Tönisson Kleppe 2008: 5, Higate 2004: 18）。その一因は、ジェンダーという抽象的な概念が人道危機の差し迫った現場において理解を得にくいといった事情がある。「結局、ジェンダー問題を教えることは、『優先課題ではない』、『PKOに不適切である』、または『時間の無駄』として、しばしば退けられることになる」（Puechguirbal 2003: 117）。しかし、この問題のより根本的な原因は訓練の実施される現場の状況ではなく、受講者の体感する疎外感や不安に由来する。マッケイは、訓練内容が

受講者の世界観を揺るがすほどの感情的かつ政治化した内容を含む点を指摘している (Mackay 2003: 220)。この点を突き詰めていくと、受講者にとってそれまで「自明」あるいは「自然」であると認識されてきた様々な問い「私は誰であるのか」、「どのように振舞うべきか」、「誰が権力を持ち、持たないのか」が社会的に構築されたものに過ぎないという現実が受講者に突きつけられていることを意味する。<sup>14</sup> 結果として、男という性の特権化してきた制度、規範や社会秩序も突き崩されることになり、受講者である男性兵士は居心地の悪さ以上のものを感じることになる。

このようにジェンダー訓練の射程が支援する側にも向けられるようになった背景には、平和維持要員による性的搾取および虐待 (SEA) という問題がある。当初、SEAはジェンダー問題という社会構築主義の観点からではなく、性の問題という本質主義の観点から捉えられてきた。後者の認識において、兵士が男性というセックスを持つ以上、女性に対する性的欲望は本能的に生じるものであり、大きく逸脱したものでない限り、国連として介入すべきではない私的な問題としてSEAは扱われてきた。<sup>15</sup> これに対して、ジェンダー専門家は兵士としてのジェンダー化されたアイデンティティとSEAとの関連性を指摘するジェンダー研究の成果を対置させた (Higate 2007, 2004, Martin 2005, Olsson 1999: 29-34)。その研究成果を概観しておく、軍は他の社会制度と比較してジェンダ

ー・ヒエラルキーに強く依存することからも、ジェンダー研究者にとって格好の分析対象となってきた。フェミニスト研究者を中心に蓄積されてきた海外にある米軍基地の周辺への影響や戦時における性暴力を対象とした研究は、兵士の関与した買春やレイプを個人化した性の問題ではなく、軍という制度から生み出される構造的なジェンダー問題である側面を明らかにしてきた (Enloe 2000, 1993, Moon 1997)。軍は新兵訓練などを通じて、任務に不必要とされる同情、臆病、脆弱といったフェミニンな価値を体現させた他者 (女性、同性愛者、人種のマイノリティなど) を兵士の内面から徹底して異化することで、より攻撃性の高いマスキュリティへの同一化を促進する制度として分析される (Gill 1997, 土佐 2000, Goldstein 2001)。この分析は、兵士のアイデンティティがナショナリティだけではなく、ジェンダー、セクシュアリティ、人種などに基づく複合的な権力関係の上に構築されていることを示唆している。サンドラ・ウィットワースによれば、いわゆる軍事化したマスキュリティは「攻撃的な異性愛主義、ホモフォビア、ミソジニー、人種主義」 (Whitworth 2004: 16) を特徴とする。そして、この過度に誇張されたマスキュリティに同一化し続けることは、大半の男性にとって容易なことではなく、その基準から逸脱していないかという心理的不安に常に苛まれるという。その不安を払拭するために、兵士は仲間同士の間で差別的ジョーク、ホモフォビアな振る舞い、あるいは女性に対する強い性



的関心を共有するなど、日常的な言説とその実践を通じて、自己の再構築をはかろうとする (Whitworth 2004:165-6, Alsop, Fitzsimons & Lennon 2002: 142-144)。

こうした研究成果は、平和維持要員となる兵士のアイデンティティ、延いては所属する軍の制度的イデオロギーへの介入もジェンダー訓練の射程に収めさせることになる。例えば、『ミッション訓練』では次のような言及をしている。

平和を維持し、住民を保護することを想定されている国際共同体を代表する軍による女性の性的虐待の事例もある。ミソジニーと攻撃的なマスキュリティという軍事的イデオロギーは、これらの軍の活動下での保護の責任をしばしば覆してしまうのである (UN DPKO 2001: 61)。

SEAはもはや私的な性的問題ではなくなり、軍から構成されるPKOの構造的なジェンダー問題として位置づけられることになる。さらに兵士としてのアイデンティティが問題化されている以上、受講者が訓練中に自らの存在を否定されるような感覚に陥ることは当然の帰結といえる。したがって、その実施において、次のような課題が浮上する。「トレーナーは咎められた感覚を引き起こさない、世界を見る新しい方法を受講者に考慮するよう促す革新的な方法を見つけなければならない」(Lyytikäinen 2007: 15)。

### ． 主体をめぐる統治、権力、政治

ジェンダー専門家はSEAの一因を特定したことで、次にその解決策を提示する段階へと移行する。ジェンダー訓練がその解決策であることに間違いはないのだが、その実施のあり方について懸念があることも事実である。複数の機関でジェンダー政策のガイドラインの作成を手がけてきたベス・ウォロニウクは、その点について次のように述べている。

(安全保障セクター制度は非常に) 徹底的に制度化された軍事化したマスキュリティに基礎を置いているので、こうした組織の全般的なイデオロギー、構造、実践に挑戦しなければ、ジェンダー訓練は端で踊っているに過ぎない。そうであるなら、ジェンダー訓練は進化という錯覚を与えることはできても、実際は何も変えはしない (Tönisson Kleppe 2007: 6)。

この見解は訓練の目的がジェンダー主流化の推進でない限り、SEAを根本的に解決できないことを指摘している。その当初の目的を見失えば、ジェンダー訓練はPKOの既存の目的 文明化した行動規範、価値、制度の移転 を達成するための効果的な手段でしなくなる。後述するようにこの懸念は現実のものとなるが、それは単に「専門家 - 官僚モデル」による弊害という枠に収まるものではない。ジェンダー訓練は、文明化のミッションを支える主体を生み出すための統治技術

となる。

2004年、先進諸国による協力の下、シェリル・ハリントンを中心に『PKOのためのジェンダー・リソース・パッケージ』（以下、『パッケージ』と略する）が取りまとめられた（UN DPKO 2004: vi）<sup>16</sup>。ジェンダーを一貫性のある政策領域として確立するために、その中にはジェンダーに関する定義、指針、問題、プログラムなど、蓄積されてきたほとんどが収められている。その最初の章で、「人のジェンダーは社会的に構築されるがゆえに、学ばれるものであり、そして変化しうるものである」（UN DPKO 2004: 1）と記されている。この主張はジェンダーに関する国連の認識を示したものであるが、ジェンダー政策を実施する公的機関の間でも広く共有されるものでもある。一見すると中立的であるが、土場学の指摘（1999: 45）を借りれば、この主張はジェンダーを「変わるもの」というだけではなく、人為的に「変えられるもの」さらには「変えるべきもの」であるという政治的実践への呼びかけを含意している。ジェンダーが社会的に構築されたものであるすなわち、自然や真理ではない。以上、問題があれば、より良いものへと取り替えれば解決できるという論理がこの呼びかけの底流にはある。この文脈において、ジェンダー訓練は兵士のアイデンティティを軍事化したマスキュリニティから平和維持要員としての新たなマスキュリニティへと変えることを促すプログラムとして位置づけられている（Puechguirbal 2003: 124）。

この政治的実践を可能にする条件は少なくとも次の三つである。第一にジェンダーを「選択」可能な問題に設定すること、第二に選択という行為を行うことのできる主体を想定すること（土場1999: 44-6, Butler 1990: 11）、そしてジェンダー訓練という事例に限って言えば、第三に選択肢の正しさを担保する「客観性」を確保することである。まず、この条件下における主体とはデカルト的なコギトであり、理性を介して心身の一貫性である自己のアイデンティティを認知でき、また自由意思を通じて一切の社会的拘束から解放される近代的な人間像を意味する。ジェンダーとの関係においていえば、主体は歴史や文化を超越した先験的存在であることから、社会的・文化的に構築されたジェンダーを一段見下ろすことのできる位置にいる。それゆえ、主体は自らの意思により、望ましいジェンダーを選ぶことができる。ただし、ジェンダー訓練は個人の選択の自由を奨励することを目的としたプログラムではないことから、専門家が選択肢として適切なマスキュリニティを事前に用意しておかなければならない。その選択肢の妥当性は、何が適切であり、また適切ではないのかを「客観」的に判別できる（とされる）専門家の権威により担保される。新たに推奨されるマスキュリニティは、専門的権威を後ろ盾に平和維持要員の多様な国籍、人種、階級、文化、地域性、セクシュアリティなどを横断して、すべての主体に適用可能な基準となる。

しかし、この近代的主体の生成過程を「統

治性」という視座から考察すると、他者に対する排除の政治が浮かび上がる。フーコーによれば、近代における統治の関心は領土問題よりも、(統計から見出される)一定の規則性を持つ人口の管理に大きく割かれるようになった(Foucault 1991)。この点で、統治とは人口として把握可能となった社会の存続に向けて、個人の行為を形成し、導き、方向づけることを目的とした諸活動を指す(Gordon 1991: 2)。こうした統治に用いられる権力は、社会という全体から逸脱しないよう、個人の行為に法的制限や禁止を加える主権権力であるよりも、むしろある行為を進んで選択する主体を生み出す形式をとる。<sup>17</sup> この生産的な権力は個人の生を体系化された知識へと組み入れることで、私的な幸福、欲望、選択などを公の関心事へと結びつける。この際、権力/知は、明示的かつ暗示的に個々の行為に社会的意味を与えるための正常/異常の境界線を画定していく言説を社会に広く行き渡らせる(Foucault 1990)。近代の諸科学は、社会から逸脱しているとされる諸集団(同性愛者、精神病患者、犯罪者など)を「異常」者として、その知の体系の中に包摂してきた。そのように判別された集団は見せしめに厳罰に処されるといった「政治的コスト」のかかる方法ではなく、規律するシステムを完備した制度(病院、監獄、軍隊など)を介して正常化する処置を施されてきた。その一方で、そのカテゴリーから漏れた人々も日常的に「異常」を参照しながら、社会における自らの「正常」性を確認する。<sup>18</sup> ジュデ

イス・バトラーが指摘したように、一貫した主体 例えば、「私は女(男)である」といった言明 の生成は、完全には主体に成りえない他者を言説的にその外側へと排除する政治的な欺瞞を常に内在する(Butler 1992: 13, 1990)。つまり、主体とは歴史や文化を超越した存在でもなければ、社会的拘束から自由を約束された存在でもない。むしろ、それは支配的な言説に服従した状態にあり(Foucault 1982: 781)。その一貫性は「正常」という地位をめぐる絶えず競合する言説の構造の内側でのみ担保されるのである。

この視座に依拠することで、ジェンダー訓練はある特定の形式の主体を生み出す統治技術として見立てることができる。ジェンダーは私的な関心や欲望、個人の行為、アイデンティティを形成するという点で権力/知の対象である(Macleod & Durrheim 2002)。ジェンダー研究はマスキュリニティの強度と構造の分析から、兵士がSEAという行為を選択する傾向を明らかにした。この分析を主体生成の過程に置き換えると、兵士は軍事化したマスキュリニティへと自己準拠的に同一化できるのではなく、女性、同性愛者、人種的マイノリティといった他者を主体の位置から排除する言説とその言説的な実践を通じて、主体としての一貫性を担保される。この過程を考慮すれば、SEAの解決は他者を周辺化する正常/異常の境界線を政治化するところにかかってくるはずである。また、その試みはジェンダー・ヒエラルキーを政治化するジェンダー主流化の目的とも交差する。ところ

が、近代的主体が他者を不在とする限り、専門家の議論から排除の政治は後景へと退くことになる。適切（正常）なマスキュリティを設定するジェンダー訓練は、「異常」な他者を召喚する言説と一対とならざるを得ない。それでは、ジェンダー訓練はどのような正常／異常の境界線を画定する言説体系に依拠するのだろうか。次節ではジェンダー専門家の言説（政策文書、議論、分析、逸話など）からこの点について考察していく。

## ・(脱) 政治化する主体の生成過程

### 1. 正常化の言説

まず、専門家間で推奨される平和維持要員としての「正常」なマスキュリティが何であるのかを見ていくために、これまで取り上げた文書に加えて、次の二つも参照しておきたい。一つは2007年に実施された400人以上の専門家による議論を要約した『安全保障部門関係者を対象とするジェンダー訓練におけるグッド・プラクティスとバッド・プラクティス バーチャル・ディスカッション・サマリー』（以下、『ディスカッション』と略する）である。もう一つはこの議論を反映して翌年にツールキット（toolkit）として編纂された『安全保障部門関係者を対象とするジェンダー訓練 グッド・プラクティスと学ばれた教訓』（以下、『ツールキット』と略する）である（Tönisson Kleppe 2007, 2008）。いずれも専門家の意見、経験、情報をフィードバックすることでジェンダー訓練の改善を目的としている。

これらの中でジェンダー以外に強調されるキーワードは「効率性」である。『パッケージ』において、ジェンダー訓練は「任務の効果的な遂行を向上するための必要条件であり、そして平和維持要員による有害な行為に加えて、政策の意図しないネガティブな効果を減らすための必要条件」と位置づけられている（UN DPKO 2004: 45）。また、上述した二つの文書は、ジェンダーを理解しないこと、無視することが任務のコストとリスクを高め、逆にそれを認識することが任務のパフォーマンスを高めることを強調する「効率性アプローチ」をグッド・プラクティスとして推奨する（Tönisson Kleppe 2008: 4, 7-8, 2007: 2）。このように効率性が強調される狙いの一つは、受講者の反発を緩和するところにある。『ディスカッション』では、受講者を「批判、非難、あるいは『去勢』することなく」、いかに軍事化したマスキュリティに対処するかという議題を取り上げている（Tönisson Kleppe 2007: 7）。その解答として『ツールキット』は、効率性アプローチが受講者の疎外感を減らすことに加えて、「軍や警察の内部で広く普及する『暴力的なマスキュリティの文化』についての内省を高める」（Tönisson Kleppe 2008: 7-8）効果を持つと指摘している。

いずれの文書も効率性アプローチがこうした効果を持つ理由についてまで言及していないが、それを推測することは難しいことではない。ジェンダー訓練が任務の効率性を引き上げるとの説明は、次のように言説レベル

から読み解くと、受講者の軍事化したマスキュリニティと軍の組織文化とほとんど齟齬をきたすものではないことが明らかとなる。そもそも効率性の実践は人間が合理的に思考し、行動する個人であることを前提とする。この人間像は決して普遍的なものではなく、西洋近代という地理的かつ歴史的に制約された空間と時間の中で立ち上げられてきた。フェミニズム研究はリベラリズムにおいて所与とされる理性と合理性を兼ね備えた人間像が、男性（とくに白人の中産階級以上）を雛形とするジェンダー化された認識論/存在論に依拠することを論証してきた（Heckman 1992, Peterson 1990, Pateman 1988, Elshtein 1981）。この点で、効率性という言説の持つメタ・メッセージは、マスキュリニティの特権性を脅かすものではなく、むしろそれを巧みに称揚しながら、合理性というマスキュリンな価値を「正常」な行動規範とする。効率性アプローチはSEAを任務全体の効率性を低下させる合理性を著しく欠いたフェミニンな行為として再定義することで、軍によりフェミニンな価値（感情、不合理、依存など）に準ずる行為を避けるよう規律されている兵士に自制を促す。要するに、この再定義はジェンダー・ヒエラルキーを政治化するよりも、むしろ自然化することから受講者の反発を緩和する効果を見込めるわけである。

## 2. 文明化の言説

効率性アプローチは上述の効果を期待されている一方で、次の二つの問題を脱政治化す

る効果も持ち合わせる。第一に、SEAは技術的に解決可能なジェンダー問題となる。ジェンダー訓練は効率性という文字通り、PKOの既存の目的を達成する効果的な道具として配備される。それが解決策として一度確立されてしまうと、新たにSEAが生じたとしても、その原因は訓練を受けなかったこと、あるいはバッド・プラクティスという技術的な欠点へと還元される。専門家は訓練の普及に尽力するか、もしくは効率性アプローチの精度を上げるべく、受講者が受け入れやすいよう男性のトレーナーを配置することや（とりわけフェミニズムに関連する）専門言語の使用を控えるなど、プログラムの更新に腐心する（Tönisson Kleppe 2008: 5-6）。

第二に、前節で述べたように近代的主体を前提とするジェンダー訓練はSEAの一因である他者に対する排除の政治を不可視なものとする。効率性をめぐる言説体系は合理性というマスキュリンな価値を「正常」な行動規範として設定するのに合わせて、その基準を満たすことのできない人々、すなわち不合理な他者を主体の位置から排除する。結論からいえば、その他者の第一候補は西洋圏外にある途上国の兵士である。植民地主義の時代から今日に至るまで、「第三世界」に属する人々は生来的に文明化した行動規範に準ずることのできない発展の遅れた存在として表象されてきた（Bowden 2004）。自己を制御する能力を欠いた「野蛮人」とされる彼らは、理性の段階にある（とされる）西洋人の男性（とくに白人の中産階級以上）を目指すべき

しかし、決して達成できない 目標として設定されてきた。この目標の普遍性は、マスキュリティだけでなく、<sup>19</sup> 有色人種に対して白人を永続的に特権化する「ホワイトネス」(whiteness)という「文化支配の幻想」(ハージ 2003: 45)により維持されている。ホワイトネスを支える構造はマスキュリティのそれと共通しており、有色人種を二項対立的に劣った他者として作り出し続ける以外に維持することができない(Hurtado and Stewart 1996: 323-324)。例えば、有色人種の男性は怠惰で、臆病で、感情的で、不合理であるのに対して、白人は勤勉で、勇敢で、理性的で、合理的となる。ジェンダー・ヒエラルキーと同じく、こうした人種化したヒエラルキーは私たちの認識を支配し、「自然」な基準として社会に広く深く浸透するのである(Keating 1996, Nakayama & Krizec 1999)。さらにホワイトネスはマスキュリティ(ジェンダー以外にも階級、セクシュアリティなど)と結びつくことで、一層「自然」な基準となる(以下、ホワイトネス&マスキュリティと略する)。<sup>20</sup>

この文脈において、有色人種である途上国の兵士はホワイトネスを欠いた不合理な他者として本質化される。しかし、もちろん、ジェンダー専門家は先進国の兵士よりも途上国の兵士が人種的に劣っているといったことを述べるわけではない。また、ホワイトネス(マスキュリティ)は明示的に文書化されているわけでもないことから、その存在の証明はそれ自体からは困難である。そこで、こ

の分野における研究者たちは、ジェンダーと同じく関係的な概念(マスキュリティ/フェミニニティ、白人(性)/有色人種)という特性を考慮して、その非対称な関係性を分析することにより、そこに潜む権力の作用を明らかにしようと試みる(Keating 1996: 905-907)。<sup>21</sup> 以下では専門家による三つの逸話を取り上げながら、正常/異常の境界線を画定する言説の痕跡を浮かび上がらせていく。

ジェンダー専門家に与えられた目標の一つは、全ての平和維持要員にジェンダー訓練を受けさせることである。途上国からの派兵が進む中で、「ジェンダー訓練を受けるほとんどの機会は軍の大半が拠出される南の諸国よりもむしろ北の諸国にある」というデータが示される(Lyytikäinen 2007: 9)。<sup>22</sup> 専門家は途上国の兵士に対する訓練の普及の重要性を強調する上でも、ジェンダー問題に対する彼らの不合理な認識と行為に言及することがある。まず、UNAMSIL(シエラレオネ)<sup>23</sup>で調査を実施した専門家は、ほとんどの兵士が派遣前に訓練を受けていないというトレーナーの話に続けて、次の国連職員の話を紹介する。「これらのアイディア(SEAの予防)は彼らに新しいものである。彼らはこうした概念を国連の問題であって、自ら自身の経験に無関係なものとしてみなす。国連の任務の間、(訓練は)義務付けられたものであっても、(SEAの予防は)自らの文化にとって適切なものだとみなされることはない」(Martin 2005: 19)。<sup>24</sup> 次に同じUNAMSILを

調査した別の専門家は、現地の文化の知識を提供する訓練の不足によって、住民に対する「植民地主義的」態度を確認している。上半身の衣服を着用していない現地の女性に対して、衣服を配給した出来事について、「ムスリムの隊員が多数を占める部隊のケースで、女性の身体の一部を見ることで認識する『攻撃性』に対応するために、自らの信奉する宗教的な実践を押し付けることが、現地住民にとって有益なものであると考えられていた」と分析されている（Higate 2004: 46-7）。最後に、ある専門家がUNTAET（東ティモール）の関係者から聞いた話として次のように語ってくれた。

部隊のメンバーの中で非常に保守的な村の出身のパキスタン人がいた。彼には妻がいて、妻以外の女性を知らなかった。その妻は保守的な村に暮らしているため、たいてい家の中にいる。彼は東ティモールに派遣された部隊に参加したが、その女性たちは彼の村のように暮らしてはいなかった。彼の解釈では、上品な女性は家にいるものであるから、公の場にいる全ての女性は男性にとって性的な対象となりうる。その結果、彼はその性的行動に対する三度目の警告によって帰国させられることになった。<sup>25</sup>

これらの逸話の共通項は、途上国の兵士の認識と行為が軍事化したマスキュリニティによってではなく、彼らの価値、宗教、信条な

ど非西洋的な文化に結びつけられていることである。当然、筆者により恣意的に列記されたこれらの逸話をもって、専門家の認識を一般化する意図はない。ここで強調しておきたいことは、対照的に先進国の兵士の認識と行為が軍事化したマスキュリニティ以外の要素に結びつけられることがほとんどないという傾向である。先進国の兵士がどのような共同体で生まれ育ち、どのような宗教や信条を個人的に持つのか、といった軍に入る以前にまでさかのぼった諸要素は専門家の調査や認識の枠外に置かれているのである。管見の限り、その例外はUNOSOM（ソマリア）におけるカナダ軍空挺部隊による現地の住民に対する暴力を分析したシュレン・ラザックの研究である。この研究で特筆すべき点は、彼らの行為を軍事化したマスキュリニティだけではなく、カナダの歴史に埋め込まれた人種主義と結びつけた「白人至上主義マスキュリニティ」から分析を試みたところにある（Razack 2004: 70, 130）。ラザックは、先進国から派遣される兵士の認識と行為も西洋的な文化に拘束されていることを指摘している。<sup>26</sup> だが、この分析が例外的である証左として、カナダ政府の調査委員会はソマリアの事件の原因について、人種主義との関係を主張した議論ではなく、軍のマスキュリニティに焦点を絞った専門家による分析結果を「正しい」解釈として採用したのである（Razack 2002: 70, 134-141）。

こうした逸話から導かれる言説体系は、先進国／途上国、西洋／非西洋、白人（性）／

有色人種、マスキュリニティ/フェミニニティ、合理性/不合理性、普遍/特殊、文明/野蛮、そして正常/異常という二元論的かつ非対称な関係性である。ここから、次のようなことが指摘できるだろう。まず、途上国の兵士が非西洋の文化に拘束されているという逸話は結局のところ、途上国の男性全てが不合理であることを含意している。途上国の男性は兵士であるかどうかに関わらず、文化に印づけられているがゆえに、SEAを引き起こす潜在的な容疑者として一括りにされる。それゆえ、効率性アプローチに基づくジェンダー訓練の主たる対象者は、必然的に合理性（あるいはホワイトネス&マスキュリニティ）という文明化した行動規範からかけ離れたところにいる途上国の兵士となる。その反面、西洋文化圏にある先進国の白人男性はほとんど無条件で合理的個人として暗に承認されることになる。別言すると、かりに先進国の兵士がSEAに関与したとしても、それは軍という特殊な制度的イデオロギーの問題であって、文明化した行動規範はその普遍性を維持されるのである。その後ろ盾となるのは内在的理性の有無ではなく、政治的に中立かつ公正とされる専門的権威である。皮肉なことに、ホワイトネス&マスキュリニティを頂点とするグローバルな価値、規範、文化、そして生の序列化は、ジェンダーという社会構築主義の知を経由することで、より本質主義的な装いを手に入れることになるのである。

## おわりに

本稿はジェンダー専門家の言説に分析的焦点を当てながら、ジェンダー訓練における主体生成の過程を考察してきた。ジェンダー専門家はジェンダー訓練を介して、兵士にSEAの一因である軍事化したマスキュリニティではなく、平和維持要員として最適なマスキュリニティを選択することを促そうとした。しかし、この近代的主体を前提とする訓練の論理は、不可避に「正常」なマスキュリニティを満たすことのできない他者を生み出すことになる。任務の効率性を引き上げる合理性が「正常」な行動規範として設定される一方で、反対にそれを引き下げる不合理性は非西洋の文化と結びつけられた。この行動規範から逸脱しているとされる途上国の兵士は統治の技術としてのジェンダー訓練を介して、ホワイトネス&マスキュリニティを「自然」な基準とする言説体系に従属する主体へと変容するよう求められることになる。しかしながら、ここで注意すべき点は途上国の兵士が実際に啓蒙されるかどうかといった問題ではなく、彼らを不合理な他者として排除することによって初めて、文明化した行動規範がその普遍性を承認されるのであり、その結果、ホワイトネス&マスキュリニティがローカルにもグローバルにも「自然」な基準として浸透していくことである。

最後に今後の研究課題について触れておくと、本稿ではグローバルなレベルでの統治性を体系的に分析する理論枠組みを提示していない。近年、ポスト構造主義やフェミニズム



の問題関心を論証する道具として、批判的言説分析 (Critical Discourse Analysis) を取りまとめた研究、もしくは適用した研究が蓄積されてきている (Hansen 2006, Lazar ed. 2005)。今後はこうした研究動向も踏まえ、理論枠組みを確立することを目指したい。ただし、この方法論的課題の克服は「実証性」を高めることを目的とするだけでなく、支配的な言説体系の構造を把握することで、多様な価値や生の共存する空間について思考する方法を論じる上でも不可欠であると考えられるからである。フーコーの「抵抗」に関する議論 「権力がある場所に抵抗がある」に従えば (Foucault 1990: 92-6)、グローバルな統治性に対する抵抗の在り処は国境を越えた空間にではなく、ジェンダー、人種、セクシュアリティなどに関わる言説的な権力/知の網の目の上にある身体という最も身近な空間にこそ見出されうる。今後は方法論を精査すると共にグローバル政治と身体との間の権力作用とその抵抗について考察を深めていきたい。

## 注

- 1 「性的搾取」とは金銭的、社会的、政治的な利益を得ることを含め、相手の脆弱性、あるいは権力関係、信頼関係を利用する、あるいは利用しようとしながら、性的目的を達成しようとする (即ち性的に搾取する) ことを意味する。また、「性的虐待」とは、強制的に、あるいは不平等又は威圧的な状況を利用することによる性的な性質を持つ身体的な介入、あるいは相手にそういった介入の恐れを感じさせることを意味する (UN Doc. ST/SGB/2003/13)。
- 2 国連の定義において、「ジェンダー訓練の目的」とは、参加者が社会における男女両方の異なる役割とニーズを理解し、ジェンダー・バイアスと差別的な行為、構造、社会的に構築された不平等に異議を唱え、そして自らの日常の仕事にこの新たな知を適用することを可能にすることである (Lyytikäinen 2007: 8)。
- 3 本稿において、ジェンダー専門家は国連のジェンダー政策に関与する人々全般を指す用語として広義に用いる。また、ジェンダー専門家については次の先行研究を参照 (Harrington 2006, Parpart 1995)。
- 4 フーコーの主体の議論を援用するジュディス・バトラー (1990) やエドワード・サイド (1993) は、主体としての優越性と特権性が本質的なものではなく、ジェンダー、人種、セクシュアリティなどに関わる言説により作り出された構造の内側でしか担保されないことを明らかにしてきた。
- 5 パーネットとフィネモアによれば、国際機関の「合理的 法的権威」は三つの実質的権威 (国家から) 委譲された権威、道徳的権威、専門的権威 から構成されるという。
- 6 土佐弘之が論じるように、統計における国際指標の設定、測定方法や結果の解釈に介入する高度な政治的判断は、「客観」の数値へと置き換えられることで、国際機関の統治は脱政治化されると共に正当性を高める (土佐 2007: 127-8)。
- 7 平和維持要員の国別内訳については次のURLが詳しい。Global Policy Forum <<http://www.globalpolicy.org/security/peacekeeping/data/index.htm>> (Accessed 2008/7/10)
- 8 途上国にとってPKOに参加するインセンティブは様々であるが、例えば、国際社会の一員として承認されること、クーデターを起こさないよう軍隊を国外へ派遣しておくこと、そして国連から支給される給与による外貨収入の引き上げなどが挙げられる (Krishnasamy 2003)。
- 9 安全保障理事会は専門家委員会を立ち上げ、1100以上の性暴力の報告書に関する情報を収集した (UN Doc. E/CN.4/1994/5)。
- 10 行動綱領第 章E.141。(総理府仮訳) 参照。原文は次のURLから閲覧できる。<<http://www.un.org/womenwatch/daw/beijing/platform/index.html>>(Accessed 2008/11/25)
- 11 フィオナ・ベヴァレッジらは「専門家 - 官僚モデル」よりも、説明責任を高めるためNGOなどを含む包括的なメンバーによって実践される「参加型 - 民主的モデル」を推奨する (Beveridge, Nott & Stephen 2000:390)。
- 12 このプログラムはオンラインでアクセスできる。<<http://www.genderandpeacekeeping.org/>> (Accessed 2008/11/15)
- 13 平和維持要員は10項目から成る「行動原則」(Code of Conduct) の遵守を求められており、そのひとつは、「とくに女性と子供の現地市民または国連職員への性的、身体的、心理的な虐待

- あるいは搾取という不道徳な行為に従事してはならない」である。
- 14 筆者によるマッケイとのインタビューを基にしている(2007年4月)。
- 15 例えば、カンボジアに展開したUNTAC代表であった明石康の発言 18歳の血気盛んな兵士にとって、2、3杯のビールを呑みたいことや若く美しい異性を追いかけていたいと思うことは当然である(Fetherston 1995: 19) はその認識を垣間見せる。
- 16 ハリントンは、UNTAET(東ティモール)でジェンダー事務局長を務めた後、DPKOでジェンダーのプロジェクト・マネージャーを務めている。
- 17 フーコーによれば、統治性は法を制定する主権権力と共に、近代社会に発達した諸個人の生を対象とする二つの様式の権力、すなわち「生権力」との相互作用から定式化する(Foucault 1991: 102)。一つは出生率や平均寿命など統計学を通じて発見された固有の規則性を持つ人口という一群を種の身体として管理する「生・政治」であり、もう一つは軍や学校といった制度内で適切に管理された時間、空間、規則等を通じて、身体を一種の機械へと変える「規律権力」である(Foucault 1990: 139-141)。
- 18 例えば、性という私秘的だった領域は体系化された知の対象となることで「出生率の向上(あるいは抑制)」という公の関心事へと結びつけられる。この文脈において出産という行為を選択する女性の身体は、「女の喜び」といった個人の幸福を表象する言説により上書きされながら、「正常」な主体として社会から承認を得ることができる。他方で出産をしない、またはできない女性の身体は不幸という個人化された状況を超えて、社会の存続を危ぶませる「異常」な存在として周辺化される。
- 19 ロバート・CONNELLが指摘するように、植民地開拓者は現地の男性をフェミニイズすることにより、自己のマスキュリティを優越化し、その支配を正当化してきた(Connell 2005: 74-5)。
- 20 CONNELLによれば、社会の中にはマスキュリティが複数存在し、人種や階級などとの組み合わせから最も称揚されるものを「ヘゲモニック・マスキュリティ」という(Connell 1995)。
- 21 アン・オーフォードは人道的介入の分析において、ジェンダーと人種の非対称な表象に焦点を当てる(Orford 1999)。
- 22 アフリカ諸国の出身者向けに、ジェンダー訓練を含むオンライン・コースも整備されている。<<http://elap.unitarpoci.org/>> (Accessed 2008/8/27)
- 23 2002年3月時点でUNAMSILを構成する16701人の兵士のうち、上位5カ国はパキスタン(4203)、バングラディシュ(4174)、ナイジェリ

ア(3236)、ケニア(996)、ガーナ(847)であり、先進国からはゼロ(軍事オブザーバーを除く)である(UN Doc. S/2002/267)。

24 ( )内は筆者。

25 筆者によるインタビュー(2007年4月)。

26 この点については、ホモフォビアとミソジニーを特徴とする「ホモ・ソーシャル」の議論とも結びつく(Sedgwick 1985)。

## 参考文献

### 英語文献

- Alsop, R. Fitzsimons, A. & Lennon, K. 2002 *Theorizing Gender*, Cambridge: Polity Press.
- Barnett, M. and Finnemore, M. 2005 "The Power of Liberal International Organizations," in M. Barnett and R. Duval(eds) *Power in Global Governance*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Beveridge, F., Nott, S. & Stephen, K. 2000 "Mainstreaming and the Engendering of Policy-Making: a Means to an End," *Journal of European Public Policy*, 7(3) 385-405.
- Beveridge, F. & Nott, S. 2002 "Mainstreaming: a Case for Optimism and Cynicism," *Feminist Legal Studies*, 10(3) 299-311.
- Bowden, B. 2004 "In the Name of Progress and Peace: the Standard of Civilization and the Universalizing Project," *Alternatives*, 29(1) 43-68.
- Butler, J. 1992 "Contingent Foundations: Feminism and the Question of 'Post-modernism,'" in J. Butler & J.W. Scott(eds) *Feminist Theorize the Political*, New York & London: Routledge.
- 1990 *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York and London: Routledge. (竹村和子訳 1999 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)
- Connell, R.W. 2005 "Globalization, Imperialism, and Masculinities," in M.S. Kimmel, J. Hearn and R.W. Connell(eds) *Handbook of Studies on Men and Masculinities*, Thousand Oaks: SAGE.
- 1995 *Masculinities*, Cambridge: Polity Press.
- Duffey, T. 2000 "Cultural Issues in Contemporary Peacekeeping," in T. Woodhouse & O. Ramsbotham, (eds.) *Peacekeeping and Conflict Resolution*, London: Frank Cass Publishers.
- Elshtain, J.B. 1981 *Public Man, Private Woman: Women in Social and Political Thought*, Second Edition, Princeton: Princeton

- University Press.
- Enloe, C. 2000 *Maneuvers: the International Politics of Militarizing Women's Lives*, Berkeley: University of California Press. (佐藤文香訳 2006 『策略 女性を軍事化する国際政治』岩波書店)
- 1993 *The Morning After*, Berkeley: University of California Press. (池田悦子訳 1999 『戦争の翌朝 ポスト冷戦時代をジェンダーで読む』緑風出版)
- Fetherston, A.B. 1995 "UN Peacekeepers and Cultures of Violence," *Cultural Survival Quarterly*, 19 (1) 19-23.
- 1994 "Putting the Peace Back into Peacekeeping: Theory Must Inform Practice," *International Peacekeeping*, 1 (1) 3-29.
- Foucault, M. 1991 "Governmentality," in G. Burchell, C. Gordon and P. Miller (eds) *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, Chicago: University of Chicago Press.
- 1990 *The History of Sexuality: An Introduction*, Vol.1, New York: Vintage Books Edition. (渡辺守章訳1986 『性の歴史 知への意思』新潮社)
- 1982 "The Subject and Power," *Critical Inquiry*, 8 (4) 777-795.
- Gill, L. 1997 "Creating Citizens, Making Men: The Military and Masculinity in Bolivia," *Cultural Anthropology*, 12 (4) 527-550.
- Goldstein, J.S. 2001 *War and Gender: How Gender Shapes the War System and Vice Versa*, Cambridge: Cambridge University.
- Gordon, C. 1991 "Governmentality Rationality: An Introduction," in G. Burchell, C. Gordon and P. Miller (eds) *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, Chicago: University of Chicago Press.
- Gordon, C. (ed) 1980 *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings 1972-1977*, New York: Pantheon Books.
- Hansen, L. 2006 *Security as Practice: Discourse Analysis and the Bosnia War*, London & New York: Routledge.
- Harrington, C. 2006 "Governing Peacekeeping: the Role of Authority and Expertise in the Case of Sexual Violence and Trauma," *Economy and Society*, 35 (3) 346-380.
- Heckman, S.J. 1990 *Gender and Knowledge: Elements of a Postmodern Feminism*, Cambridge: Polity Press. (金井淑子他訳 1995 『ジェンダーと知 ポストモダン・フェミニズムの要素』大村書店)
- Higate, P. 2007 "Peacekeepers, Masculinities, and Sexual Exploitation," *Men and Masculinities*, 10 (1) 99-119.
- 2004 *Gender and Peacekeeping Case Studies: The Democratic Republic of the Congo and Sierra Leone*, Monograph No 91.
- Hurtado, A. & Stewart, A.J. 1996 "Through the Looking Glass: Implications of Studying Whiteness for Feminist Methods," in M. Fine, L. Weis, L. P. Pruitt, A. Burns (eds) *Off White: Reading on Power, Privilege, and Resistance, Second Edition*, New York & London: Routledge.
- Jahan, R. 1995 *The Elusive Agenda: Mainstreaming Women in Development*, London: Zed Books Ltd.
- Keating, A.L. 1995 "Interrogating 'Whiteness': (De)Constructing 'Race,'" *College English*, 57 (8) 901-918.
- Krishnasamy, K. 2001 "'Recognition' for Third World Peacekeepers: India and Pakistan," *International Peacekeeping*, 8 (4) 56-76.
- Lazar, M.M. *Feminist Critical Discourse Analysis: Gender, Power and Ideology in Discourse*, New York: Palgrave Macmillan.
- Lyytikäinen, M. 2007 *Gender Training for Peacekeepers: Preliminary Overview of United Nations Peace Support Operations*, Gender, Peace and Security, Working Paper4, UN-INSTRAW.
- Mazurana, D. & Piza-Lopez, E. 2002 *Gender Mainstreaming in Peace Support Operations: Moving beyond Rhetoric to Practice*, London: International Alert.  
<<http://www.international-alert.org/pdf/PSOPDF>> (Accessed 2004/2/5)
- Mackay, A. 2005 "Mainstreaming Gender in United Nations Peacekeeping Training: Examples from East Timor, Ethiopia, and Eritrea," in D. Mazurana, A. Raven-Roberts & J. Parpart (eds), *Gender, Conflict, and Peacekeeping*, Oxford: Rowman & Littlefield Publishers, INC.
- 2003 "Training the Uniforms: Gender and Peacekeeping Operations," *Development in Practice*, 13 (2 & 3) 217-222.
- Macleo, C. & Durrheim, K. 2002 "Foucauldian Feminism: the Implication of Governmentality," *Journal of the Theory of Social Behaviour*, 32 (1) 41-60.
- Martin, S. 2005 *Must Boys Be Boys?: Ending Sexual Abuse and in UN Peacekeeping Missions*, Refugee International.
- Mehta, U.S. 1990 "Liberal Strategies of Exclusion," *Politics and Society*, 18 (4) 427-454.

- Miller, L.L. 1997 "Do Soldiers Hate Peacekeeping? The Case of Preventive Diplomacy Operations in Macedonia," *Armed Forces & Society*, 23(3) 415-450.
- Mills, S. 1997 *Discourse*, London and New York: Routledge.
- Moon, K.H.S. 1997 *Sex among the Allies: Military Prostitution in U.S.-Korea Relations*, New York: Columbia University Press.
- Nakayama, T.K. & Krizek, R.L. 1998 "Whiteness as a Strategic Rhetoric," in T.K. Nakayama & J. N. Martin (eds), *Whiteness: the Communication of Social Identity*, Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications.
- Olsson, L. 1999 *Gendering UN Peacekeeping: Mainstreaming a Gender Perspective in Multidimensional Peacekeeping Operations*, Report No. 53, Uppsala University Department of Peace & Conflict Research.
- Orford, A. 1999 "Muscular Humanitarianism: Reading the Narratives of the New Interventionism," *European Journal of International Law*, 10(4) 679-711.
- Paris, R. 2002 "International Peacebuilding and the 'mission civilisatrice'," *Review of International Studies*, 28(4) 637-656.
- Parpart, J.L. 1995 "Deconstructing the Development 'Expert': Gender, Development, and the 'Vulnerable Groups'," in M.H. Marchand, & J.L. Parpart (eds) *Feminism/Postmodernism/Development*, London & New York: Routledge.
- Pateman, C. 1988 *The Sexual Contract*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Peterson, V.S. & Runyan, A.S. 1999. *Global Gender Issues*, Second Edition, Boulder: Westview Press.
- Peterson, V.S. 1990 "Whose Rights? A Critique of the 'Givens' in Human Rights Discourse," *Alternatives*, 15(3) 303-344.
- Pollack M.A. & Hafner-Burton E. 2000 "Mainstreaming Gender in the European Union," *Journal of European Public Policy*, 7(3) 432-456.
- Puechguirbal, N. 2003 "Gender Training for Peacekeepers: Lessons from the DRC," *International Peacekeeping*, 10(4) 113-128.
- Razack, S. 2004 *Dark Threats and White Knights: The Somalia Affair, Peacekeeping, and the New Imperialism*, Toronto: University of Toronto Press.
- Rees, T. 2005 "Reflections on the Uneven Development of Gender Mainstreaming in Europe," *International Feminist Journal of Politics*, 7(4) 555-574.
- Rehn, E. & Sirleaf, E.J. 2002 *Women, War, Peace: The Independence Expert's Assessment on the Impact of Armed Conflict on Women and Women's Role in Peace-building*, New York: UNIFEM.
- Sedgwick, E.K. 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press. (上原早苗, 亀澤美由紀訳2001『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)
- Tönisson Kleppe, T. 2008 *Gender Training for Security Sector Personnel: Good Practices and Lessons Learned*, UN-INSTRAW, DCAF. 2007 *Good and Bad Practices in Gender Training for Security Sector Personnel: Summary of a Virtual Discussion*, UN-INSTRAW, OSCE-ODIHR, DCAF.
- UN 2002 *Women, Peace and Security: Study Submitted by the Secretary-General Pursuant to Security Council Resolution 1325 (2000)* New York: United Nations.
- UN DPKO 2004 *Gender Resources Package for Peacekeeping Operations*, produced by Peacekeeping Best Practice Unit, New York: United Nations.
- UN DPKO 2001 *Gender and Peacekeeping Operations In-Mission Training*, New York: United Nations.
- UN DPKO 2000 *Mainstreaming a Gender Perspective In Multidimensional Peace Operations*, New York: United Nations.
- Whitworth, S. 2004 *Men, Militarism and UN Peacekeeping: A Gendered Analysis*, Boulder: Lynne Rienner Publishers, Inc.
- Woodward, A. 2003 "European Gender Mainstreaming: Promises and Pitfalls of Transformative Policy," *Review of Policy Research*, 20(1) 65-80.

### 日本語文献

- サイド, E 1993 (板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳)『オリエンタリズム 上・下』平凡社。
- 土佐弘之2007「グローバルな統治性」芹沢一也、高桑和巳編『フーコーの後で 統治性・セキユリティ・闘争』慶応義塾大学出版会。
- 2000『グローバル/ジェンダー・ポリティクス 国際関係論とフェミニズム』世界思想社。
- 土場学1999『ポスト・ジェンダーの社会理論』青弓社。
- クマラスワミ, R. (クマラスワミ報告書研究会訳) 2000『女性に対する暴力 国連人権委員会特別報告書』明石書店。

ハージ, G. 2003 (保苅実、塩原良和訳)『ホワイト・ネーション　ネオ・ナショナリズム批判』平凡社。

〔付記〕本稿は、拙稿「統治性のグローバルな展開  
平和維持活動におけるマスキュリニティを  
めぐる政治」(佐藤幸男、前田幸男編『世界政治  
を思想する』国際書院、近刊に所収)を大幅に  
加筆修正したものである。

\* 投稿受付：2008年11月28日  
最終稿受理：2009年3月24日

# Gender Training as the Technique of Government

WADA Kenji<sup>\*</sup>

## Abstract

The purpose of this paper is to investigate the discursive process of subject formation in gender training for peacekeepers by drawing on the Foucauldian notion of “governmentality.” Contemporary peacekeeping operations ask peacekeepers to acquire gender perspectives in order to not only acknowledge different needs and experiences of local peoples during and after the armed conflicts, but also recognize the unexpected influences of peacekeeping operations on these peoples. In particular, it is expected that acquiring a gender perspective will prevent peacekeepers from engaging in the sexual exploitation and abuse (SEA). In solving SEA, the gender experts who bring knowledge of gender studies into policy tools seek to improve “militarized masculinity,” a cause of SEA, by promoting gender training that implicitly encourages soldiers to identify themselves with new masculinity as peacekeepers.

In this context, it should be noted that the philosophical condition of gender training presupposes the Cartesian subject at the trans-historical and trans-cultural position. It assumes that peacekeepers as the subject can attain ideal masculinity through technical guidance. However, through drawing on the Foucauldian notion of “governmentality,” gender training can be seen as being a technique of government that aims at normalizing peacekeepers as rational individuals in accordance with the civilized norms of whiteness and masculinity. Michel Foucault defined “government” as the activities and practices aiming to shape, guide and affect the conduct of persons. For him, the power/knowledge nexus serves to give social meanings of normal/abnormal to the conduct of persons. In this view, the subject can be stabilized

---

\* Graduate Student, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

only within the discursive structure that excludes the “ others ” who cannot completely meet the civilized norm.

Keeping this in mind, this analysis sheds light on the discourses of gender experts ( policy papers, debates and anecdotes on gender training and SEA ) by exploring the following questions: ( 1 ) how does “ whiteness and masculinity ” create normality? and ( 2 ) who are the “ others ” excluded in this subject formation?